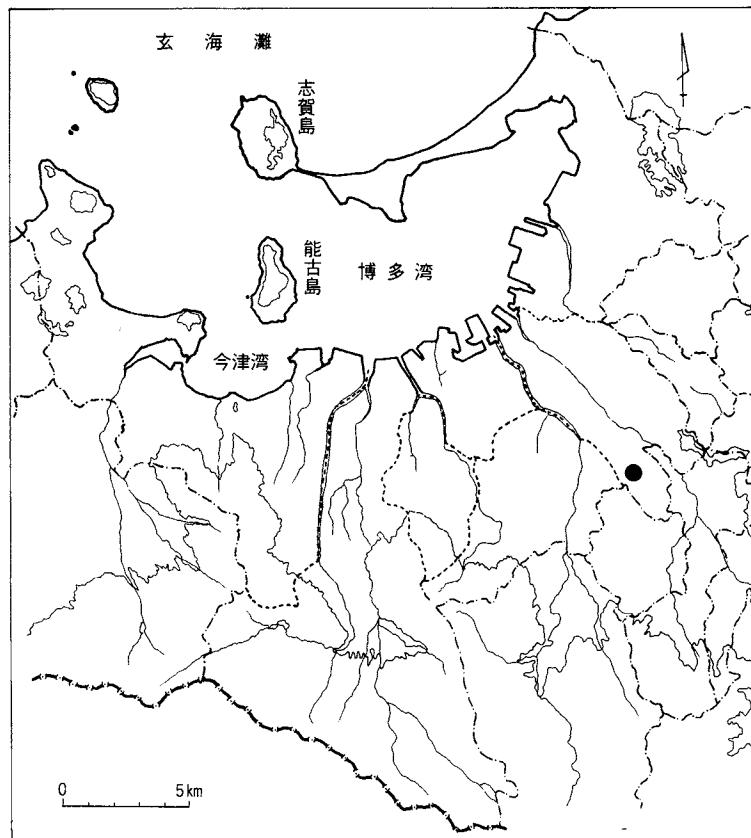


— 福岡市博多区 —

南八幡遺跡第1次・三筑遺跡第2次調査

— 古墳時代集落・近世集落の調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第488集



遺跡略号 : M H M · S C C
調査番号 : 7937 · 8019

1997

福岡市教育委員会

南八幡遺跡・三筑遺跡調査会

序

福岡平野の南部地域は、弥生時代の奴国を中心地であった須玖岡本遺跡に近く、各時代の大規模遺跡が多く残されている地域であります。この地域は昭和40年代より住宅地としての開発が急速に進んでおり、福岡市への交通体系が整備されるなかで人口集中が特に著しい状況にあります。このような状況下では開発事業にともなって貴重な文化財が消滅する状況にあります。このため福岡市教育委員会では工事のためやむを得ず失われる遺跡については発掘調査を行い、記録保存に努めているところです。

さて、今回報告します二つの遺跡は、いずれも民間の共同住宅建設に伴って昭和54・55年度に調査を行ったもので、古墳時代中期と古代～近世集落の一部が検出されています。本書が、市民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識につながり、さらに学術研究の分野にいささかでも貢献することができれば幸甚に存じます。

最後に調査に際して様々なご協力をいただきました立石産業株式会社および渡辺重則氏に対し、心より感謝の意を表する次第であります。

平成8年3月29日

福岡市教育委員会
教育長 尾 花 剛

例　　言

1. 本書は、戸建住宅および共同住宅建設にともなって発掘調査を実施した福岡市博多区南八幡2丁目8-5（南八幡遺跡1次）および同区三筑2丁目13-2（三筑遺跡2次）所在の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、昭和54年度（南八幡遺跡1次）と昭和55年度（三筑遺跡2次）に実施した。
3. 発掘調査で検出した各遺構は、溝状遺構をS D、土壙をS X、ピットをS Pを表記した。
4. 本書に使用した遺構実測図の作成は、調査担当者の他に吉原滝雄が行った。また、遺物の実測は、横山が行った。
5. 本書に使用した図面類の整図および製図は、すべて横山が行った。
6. 本書に使用した写真は、遺構を柳澤が、遺物を横山が行った。
7. 本書の執筆・編集は、関係者の協力をえて横山が行った。
8. 本書で使用した方位は、すべて磁北である。
9. 本書に関する調査記録類、出土遺物は、平成7年度に福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

本文目次

第一章	はじめに	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
第二章	遺跡の立地と環境	2
〔南八幡遺跡第1次調査〕		
第三章	調査の記録	5
1.	調査概要	5
2.	検出遺構	6
	S D 01溝	6
	S D 02溝	8
	S D 03溝	8
	S D 04溝	8、9
第四章	おわりに	9、10
〔三筑遺跡第2次調査〕		
第五章	調査の記録	11
1.	調査概要	11
2.	検出遺構	11～14
第六章	おわりに	15

図版目次

P1. 1	南八幡遺跡遺構全景（東より）
P1. 2	南八幡遺跡 S D 01・03・04出土状況
P1. 3	南八幡遺跡 S D 01溝内遺物出土状況

挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
Fig. 2	周辺調査地点図 (1/5,000)	4
Fig. 3	南八幡遺跡調査区図 (1/500)	5
Fig. 4	土層断面図 (1/40)	6
Fig. 5	出土遺物実測図 (1) (1/3)	7
Fig. 6	北壁土層断面図 (1/40)	8
Fig. 7	出土遺物実測図 (2) (1/3)	9
Fig. 8	遺構出土状況全体図 (1/200)	10
Fig. 9	三筑遺跡土層模式図 (1/40)	11
Fig. 10	三筑遺跡調査地区図 (1/2500)	12
Fig. 11	遺構出土状況全体図 (1/200)	13
Fig. 12	S X 01・S X 02土壙出土状況実測図 (1/40)	13
Fig. 13	出土遺物実測図 (1/3)	14

表目次

Tab. 1 調査遺跡一覧

第一章 はじめに

1. 調査に至る経過

【南八幡1次調査】 立石産業(株)より昭和54(1974)年5月18日付で、博多区南八幡1丁目8番5地内における分譲住宅(7棟)開発の計画が出され、開発受付後の6月14・20日に試掘調査を行った。この結果、設定した3本のトレンチにおいて地表下80~105cmの深さで遺構のる地山が認められ、西側を中心に古墳時代の溝、柱穴などが検出された。また対象地は東より西に傾斜する地形のため造成にあたっては切土工事が伴い、対象地西側主に分布する遺構が削平されることが明らかとなった。このため試掘後の6月27日に記録保存のための発掘調査についての最終協議を行い、同年10月12日より発掘調査にかかり11月10日に終了した。

【三筑2次調査】 博多区麦野4丁目の渡辺重則氏より昭和55年(1975)年9月22日付で、博多区三筑二丁目13-2地内における共同住宅開発の計画が出され、開発受付後の10月19日に試掘調査を行った。この結果設定した2本のトレンチから、地表下40cmのところで古代の遺物や溝状遺構などが検出された。

開発計画によると同地に建設される建物は5階建ての特殊建築であり、基礎工事によって地下に遺存する遺構がほとんど失われることから本格的調査を前提に協議を重ねたが、調査時期・調査費用の内容をめぐって調整がつかず、本格的調査は年明けの昭和56(1976)年1月19日からはじまり同1月30日に終了した。

調査は、水田の低地であることにより湧水が多く、雨天の際の雨水が調査区に流入する状況にあり、排水には困難をきわめた。また、対象地内の排土処理であったために調査範囲は北側半分の地区に限定せざるを得なかった。

2. 調査の組織

【南八幡1次調査】

調査委託 立石産業株式会社

調査主体 南八幡遺跡調査会

調査総括 文化課長 於保清登、文化財第2係長 柳田純孝

庶務担当 岡島洋一 **調査担当** 柳沢一男、横山邦継

整理作業 木村良子、安野 良、副田則子

【三筑2次調査】

調査委託 渡辺重則

調査主体 三筑遺跡調査会

調査総括 文化課長 甲能貞行、文化財第2係長 折尾学

庶務担当 松延好文 **調査担当** 折尾学、横山邦継

整理作業 木村良子、安野 良、副田則子

Tab. 1 調査遺跡一覧

遺構名	遺跡調査番号	遺跡番号	調査地地籍	分布地図番号	調査対象面積(m ²)	調査面積(m ²)	調査期間	調査担当者
南八幡 1次	7937	MHM	博多区南八幡 2丁目8-5	0051	1,045	680	1979.10.12~ 1979.11.10	柳沢一男 横山邦継
三筑 2次	8019	SCC	博多区三筑 2丁目13-2	0104	1,628	540	1981.1.19~ 1981.1.30	折尾 学 横山邦継

第二章 遺跡の立地と環境

南八幡、三筑遺跡を含む諸岡川中流域は、阿蘇山の噴出した鳥栖ローム層を基盤とする低丘陵と諸岡川の當力による沖積地がひろがり、遺跡立地のうえで良好な環境を現出している。

また、この地域の東側には、御笠川、西側には那珂川が博多湾に向かって流れしており、両河川に挟まれる地域は連綿とローム台地がひろがり、福岡平野では最大の遺跡群を形成している。

以下では今回調査を行った両遺跡の理解のために、周辺に点在する主要な遺跡について略述することにしたい。(Fig. 1)

御笠川右岸の低地にある雀居遺跡は、空港西側整備に伴う調査によって明らかになった遺跡である。弥生時代前期の集落跡、後期の環濠集落で、濠内側に大型掘立柱建物を含む。遺跡は特に低湿地であるため、有機質の遺物が多く存在する。柱などの建築部材、農具類、武器、工具類などを豊富に出土している。また、平安時代以降では水田遺構の残りが非常に良好である。(1)

雀居遺跡の南西側 2 km の微高地上に立地する板付遺跡は、北部九州を代表する弥生時代前期の環濠集落である。集落周辺の沖積地には当該期の水田が広がり、集落南側には朝鮮半島より将来された青銅製武器を副葬した墳丘墓が形成されている。(2)

板付遺跡の北側の沖積地には、那珂君体(くんりゅう)遺跡が広がる。弥生時代後期、古墳時代中期、中世期の良好な水田遺構が主体となる。特に、弥生～古墳時代の水田は、立地上の制約のためか田面の単位面積が小さく、連続して蜂の巣状になる。また、大規模の堰や水路を伴っている。(3)

那珂君体遺跡の北西側一帯は、鳥栖ローム層を基盤とする洪積丘陵が広がり、那珂・比恵遺跡(4・5)という大規模遺跡を形成している。両遺跡は、当然地形的に連続していることから 2 遺跡に厳密に区別することはできないが、遺跡分布の上でそれぞれ特徴をもっている。いずれも弥生時代中期～後期の大規模集落であるが、青銅器鋳造の工房跡や鋳型の出土数からは南部にあたる那珂遺跡側に主体がある。また、柵列を伴う掘立柱建物群などは北部の比恵遺跡に含まれ、数地点に点在して分布する。また、瓦を伴う遺構は、那珂遺跡に多く、郡が、郡寺の可能性が高い。

板付遺跡の南西 2 km には諸岡遺跡がある。弥生時代前期末土器と朝鮮系無文土器との共伴が始めて確認された遺跡である。また、弥生時代前期末～後期の墓地を擁し、諸岡型ゴホウラ製貝輪を出土している。(6)

雜餉隈遺跡は、主に 7 世紀後半から奈良時代の集落遺跡である。堅穴住居群を主体にしており、全体に遺構の保存が非常に良好である。壁面の高さが 0.8 m を越えるものが多く在り、カマドの遺存も同様に良好である。(7)

井尻遺跡では、弥生時代後期の青銅器鋳造工房が検出されており、最近では鏡の鋳型の片面に鎌の範を同時にしつらえた鋳型なども堅穴住居から出土している。また、井尻大塚といわれる前方後円墳も知られる。瓦の出土も比較的大量に出土することから、官がもしくは寺院のあった可能性も考えられる。(10)

日佐遺跡は、弥生時代後期の墓地群である。(11)

須玖岡本遺跡は、弥生時代中期中葉から後期を中心とする集落、墓地の遺跡で、奴国を中心とした地域と

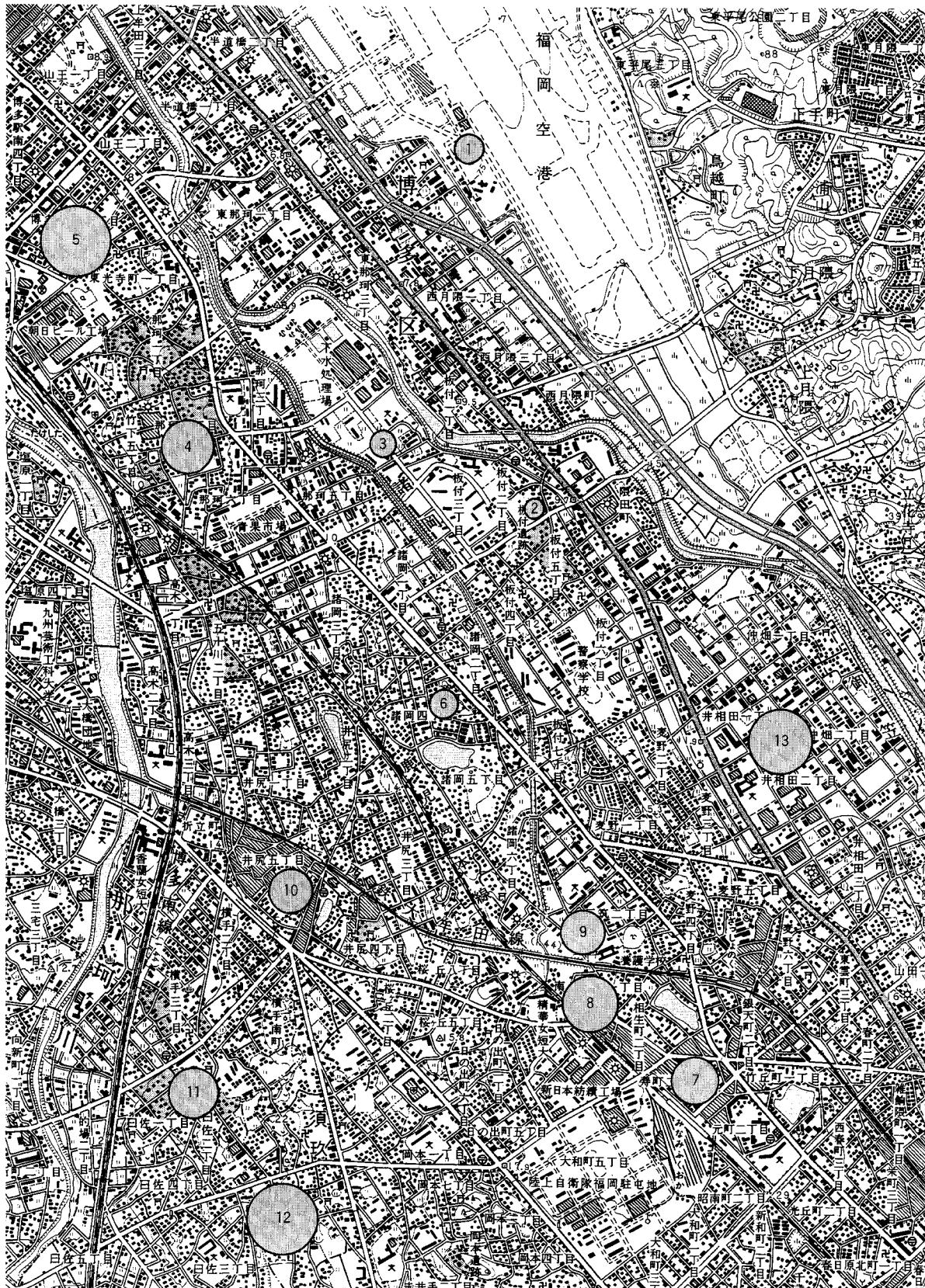


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- | | |
|-----------|-------------|
| 1. 雀居遺跡 | 8. 南八幡遺跡群 |
| 2. 板付遺跡 | 9. 三筑遺跡群 |
| 3. 那珂君休遺跡 | 10. 井尻遺跡群 |
| 4. 那珂遺跡群 | 11. 白佐遺跡群 |
| 5. 比恵遺跡群 | 12. 須玖岡本遺跡群 |
| 6. 諸岡遺跡群 | 13. 井相田遺跡 |
| 7. 雜飼遺跡群 | |

考えられている。遺跡は、中国製の鏡鑑や装身具などを集中副葬した甕棺墓地のほかに、玉類や青銅製品の鋳型を出土する鋳造遺構などからなり、諸岡、那珂、比恵遺跡なども範疇に含むものと考えられる。(12)

井相田遺跡は、古墳時代後期の集落及び古代～中世にかけての集落遺跡である。特に、古代では竪穴住居や井戸が検出され、人面墨書き土器などが共伴しており、一般集落とは考えにくい。

また、中世は、集落とともに水田遺構が顕著であり、特に信仰遺物として九州ではまれな「柿経（こけらきょう）」も出土している。(13)

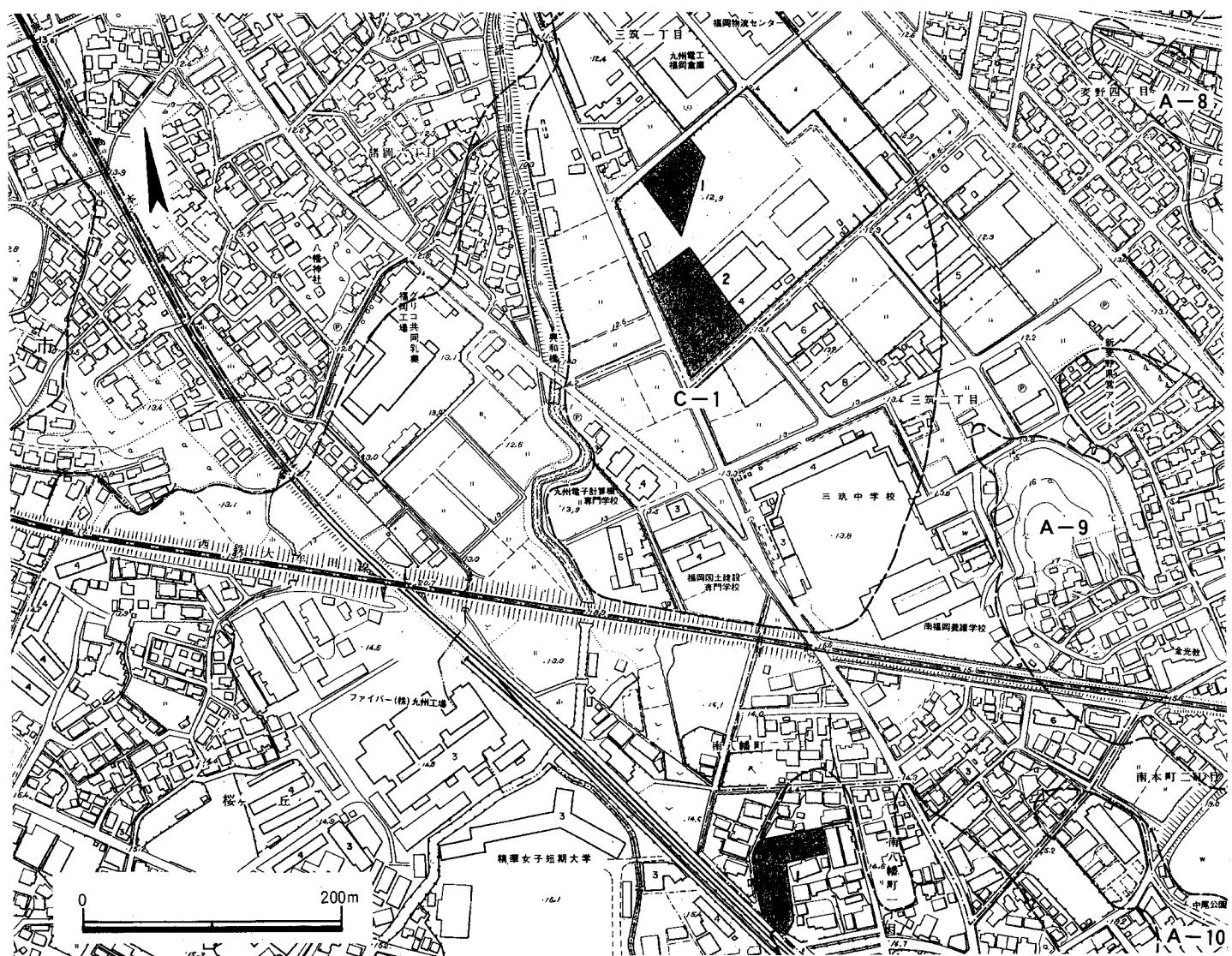


Fig. 2 周辺調査地点図 (1/5,000)

[南八幡遺跡第1次調査]

第三章 調査の記録

調査概要

調査地点は、標高16mを測る舌状丘陵の西側緩斜面にあたり、北東から南西方向に緩く傾斜する。調査は、事前の試掘調査の所見に基づいて、対象地の西側区域を中心に遺構の検出を行った。最初には北側の進入路部分を先行して行い、傾斜面に対してほぼ平行し、南北に伸びる溝2条（S D 01, 04）及び柱穴群多数を検出した。なお、この北側の柱穴群は、規模も小さく、埋土からは殆ど該期の遺物が出土していない。また、調査の大半部を占める南側では、第2次世界大戦当時の防空壕あるいは風倒木による搅乱が随所にみられ、遺構の遺存にかなりの影響を与えている。



Fig. 3 南八幡遺跡調査区図 (1/500)

南側では、S D 01溝がほぼ直線的に南側に伸びており、調査区の中央では西側に分岐する小溝（S D 03）が検出された。また、調査区南西隅には円形に弧をなす、小溝（S D 02）1条が検出された。溝は、埋土の土質や平面的に切り会いを持たない点、出土土師器からほぼ同時期の所産と考えられる。

更に、溝周辺部では特に S D 01と S D 03の分岐する地区の周辺で小破片ながら土師器を出土する柱穴群が集中しており、掘立柱建物を主にした生活遺構が想定される。

また、遺構としては存在しないが、遺構検出面から安山岩製石鏃やパティナの進行した黒曜石剝片などが出土しており、この調査地点が縄文時代、後期旧石器時代の生活域にあったことが知られた。

2. 検出遺構 (Fig.8, PL.1~3)

検出した遺構は、溝4条と柱穴群である。これらは、地山である黄褐色ロームの直上に堆積した黒色土～黒色粘質土中もしくは層下面から掘り込まれた遺構群である。

S D 01 (Fig.5,7,8) 調査区の北端から南西隅へやや蛇行しながら伸びる小溝で、延長32m、幅0.5 ~1.8m、深さ0.2 ~0.3mを測る。全体に壁面は直立しているが、調査区中央では幅員が大きくなり、緩い皿状の断面をなしており、この部分に当該期の土師器類がまとまって包含されていた。土器類の出土した状況は、当初から破片となっていたのではなく、ほぼ完形に近い個体を投棄したものと考えられる。

出土遺物 (Fig.5,7)

小型丸底壺 (Fig.5) 00004は、頸部以下を欠く丸底壺である。ほぼ直線的に外反する口縁は、端部が丸い。器色は、内外面ともに淡黄褐色を呈し、器面の荒れが激しい。調整は、外面の一部に粗い刷毛目が残り、他は横ナデを施す。内面は、下半部に粗い横ナデが見られる。胎土は砂質で、焼成は軟質である。口径13.4cmを測る。00010は、胴部下半を欠く丸底壺である。口縁の外反は比較的弱く、小型である。器色は、内外面ともにほぼ暗赤褐色を呈し、外面下半にススが付着している。調整は、外面口縁が横ナデ、これ以下は細いタテ刷毛目を残す。また、内面口縁は、粗いナナメ刷毛目、下半胴部は横方向のヘラケズリを施す。胎土に細砂の混入が多い。焼成は、やや軟質である。口径10cmを測る。00006は、やはり底部付近を欠く大型の丸底壺である。器色は、内外面ともに暗赤褐色を呈し、外面の胴部に黒斑がみられる。調整は、外面がヘラによる横ナデで、内面胴部はナナメケズリ後に頸部付近に指オサエを施す。胎土には粗砂を少量混入し、焼成は軟質である。口径は、14.2cmを測る。

甕 (Fig.5,7) 00002は、口縁部が直立し、球状の胴部を有するいびつな甕である。器色は、外面赤褐色を呈し、頸部以下は殆ど黒斑で占められる。内面は暗赤褐色である。調整は、外面にタテ刷毛目を残

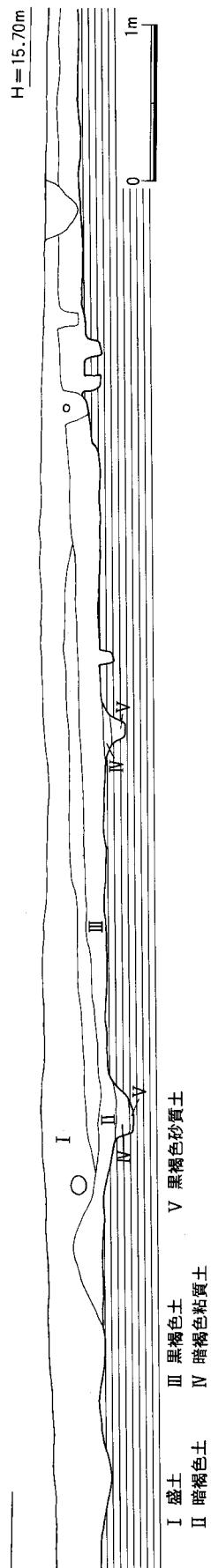


Fig. 4 土層断面図 (1/40)

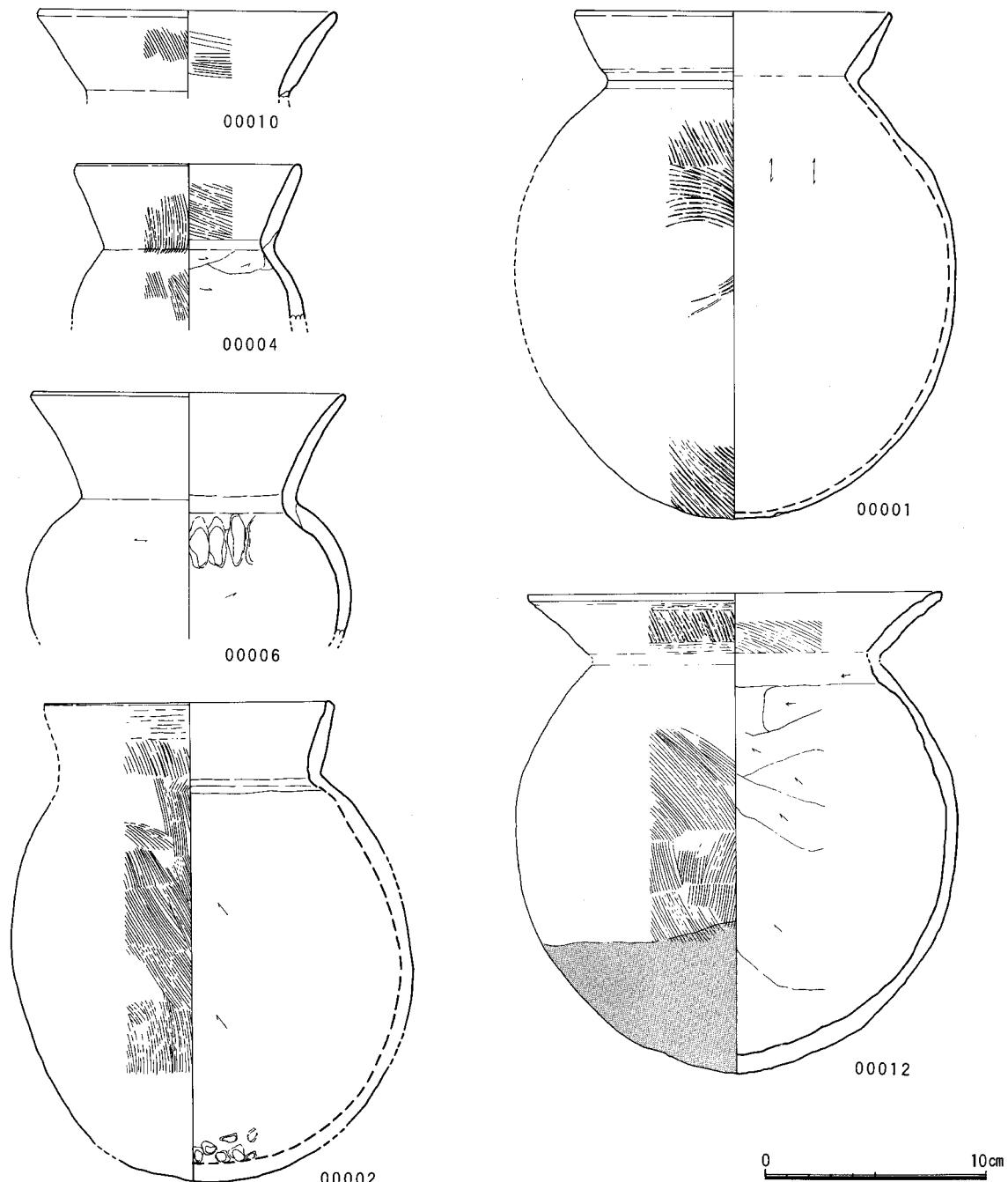


Fig. 5 出土遺物実測図(1) (1/3)

し、内面は口縁が横ナデで、胴部はナナメのヘラケズリを施し、底部に指オサエが見られる。器壁は、以外に分厚く、胎土に石英砂の混入が多い。焼成は、不良である。口径13.2cm、胴部最大径18.2cm、器高21.8cmを測る。00001は、球状胴部によくしまった頸部を有し、短い外反する口縁部をもつ甕である。器色は、内外面ともに淡赤褐色を呈し、外面の2/3以下は黒斑が多く、スヌが付着している。調整は、外面口縁が横ナデで、胴部上半や底部に粗い刷毛目を残す他はナデである。また、内面は、胴部が底部からのヘラケズリ、口縁には一部に粗い斜めの刷毛目が残る。器壁は、調整が行き届いており、非常に薄いものとなっている。胎土に石英粗砂を多く混入する。焼成は、軟質である。口径14.3cm、胴部最大径20.0cm、器高23.0cmを測る。00012は、ややとがり気味の底部を有し、長めの口

縁部は緩く外反する。器色は、外面が暗褐色を呈し、胴部の1/3以下はススが付着する。また、内面は、淡黄褐色を呈する。調整は、口縁・胴部共に斜め方向の刷毛目が残る。また、内面口縁は、粗い斜め刷毛目、胴部はヘラケズリを施す。胎土に粗砂を多く混入している。焼成は、堅緻である。口径19.0cm、胴部最大径20.1cm、器高21.9cmを測る。

短頸壺 (Fig.7) 00013は、球状の胴部にやや外反する短い口縁部を有する壺である。器色は、内外面共に暗褐色を呈する。調整は、外面口縁が横ナデで、胴部はタテ刷毛目調整後に斜めのヘラナデを施す。また、内面は、胴部がヘラケズリ後に横ナデである。胎土には、石英細砂を多く混入している。

焼成は、堅緻である。口径14.0cmを測る。00009も同様の壺で、口縁端部を欠く。器色は、淡赤褐色を呈し、内面は淡褐色を呈する。調整は、内外面共に荒れが著しく、外面胴部の一部に粗い斜め刷毛目が残る。胎土は、石英砂の混入が多く、焼成は堅緻である。

高 (Fig.7) 00014は、脚部を欠く高壺である。薄作りで、壺の立上りの接合部内面は特徴的にくぼみが囲繞する。器色は、内外面共に淡黄褐色を呈し、外面には大黒斑が見られる。調整は、内外面共に横ナデである。胎土は非常に密で、焼成はやや軟質である。口径15.4cmを測る。00015も壺部の破片である。00014と同様の特徴を有し、器色は淡赤褐色を呈する。調整は、内外面共に横ナデである。胎土は、非常に密で、焼成も堅緻密である。

00005は、脚裾部まで有する高壺である。全体にいびつである。器色は、外面淡褐色を呈する。器面は全体に荒れが著しく、内面にヘラケズリの痕跡を残す。胎土は密で、焼成は堅緻である。

S D 02 (Fig.7,8) 調査区の南西隅に検出された円形に回る小溝である。延長4.3m、幅0.8m、深さ0.25mを測る。溝の性格、機能は大半が調査区外にあるので不明である。

出土遺物 (Fig.7) 00011は高壺脚部破片である。器色は、外面暗黄褐色、内面淡褐色を呈する。調整は、内面に時計回り方向のヘラケズリを施す。胎土は、石英砂の混入が多いが、密である。焼成は、堅緻である。

S D 03 (Fig.7,8) 調査区のほぼ中央に位置し、S D 01より西側に分岐する小溝である。前述の様にS D 01はこの地点で急に幅員を広げることから一種の溜りとなるのではないかと思われ、これよりオーバーフローする水流をさらに低地に流すのがこのS D 03ではないかと考えられる。

出土遺物 (Fig.7) 00003は、大型甕の底部である。不安定な平底をなす。器色は、内外面共に淡黄褐色を呈する。調整は、外面がタテ刷毛目後に一部タテケズリを施す。また、内面は、幅8mm程度の工具によるタテ刷毛目調整後に、ナデを施す。胎土は混入物が少なく、密である。焼成も堅緻である。底部径9cmを測る。

S D 04 (Fig.7,8) 調査区の西側緩斜面をかすめるように走る、直線的な小溝である。延長11m、幅0.5m、深さ0.3mを測る。西側壁面の土層断面によるとそれほど長時間水流が流れたようには思われない。

出土遺物 (Fig.7) 00007は、壺部及び脚裾部を欠く高壺である。器色は、内外面共に淡褐色を呈し、外面は丹塗りである。調整は、壺部との境にタテヘラナデ、内面は横方向のヘラケズリを施す。胎土は、非常に密で、石英粗砂を若干混入する。焼成は、堅緻である。

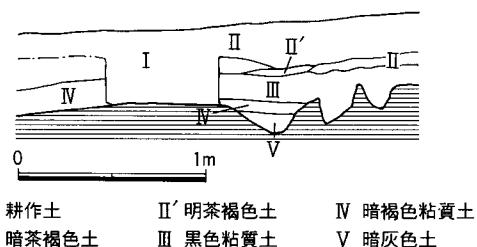


Fig. 6 北壁土層断面図 (1/40)

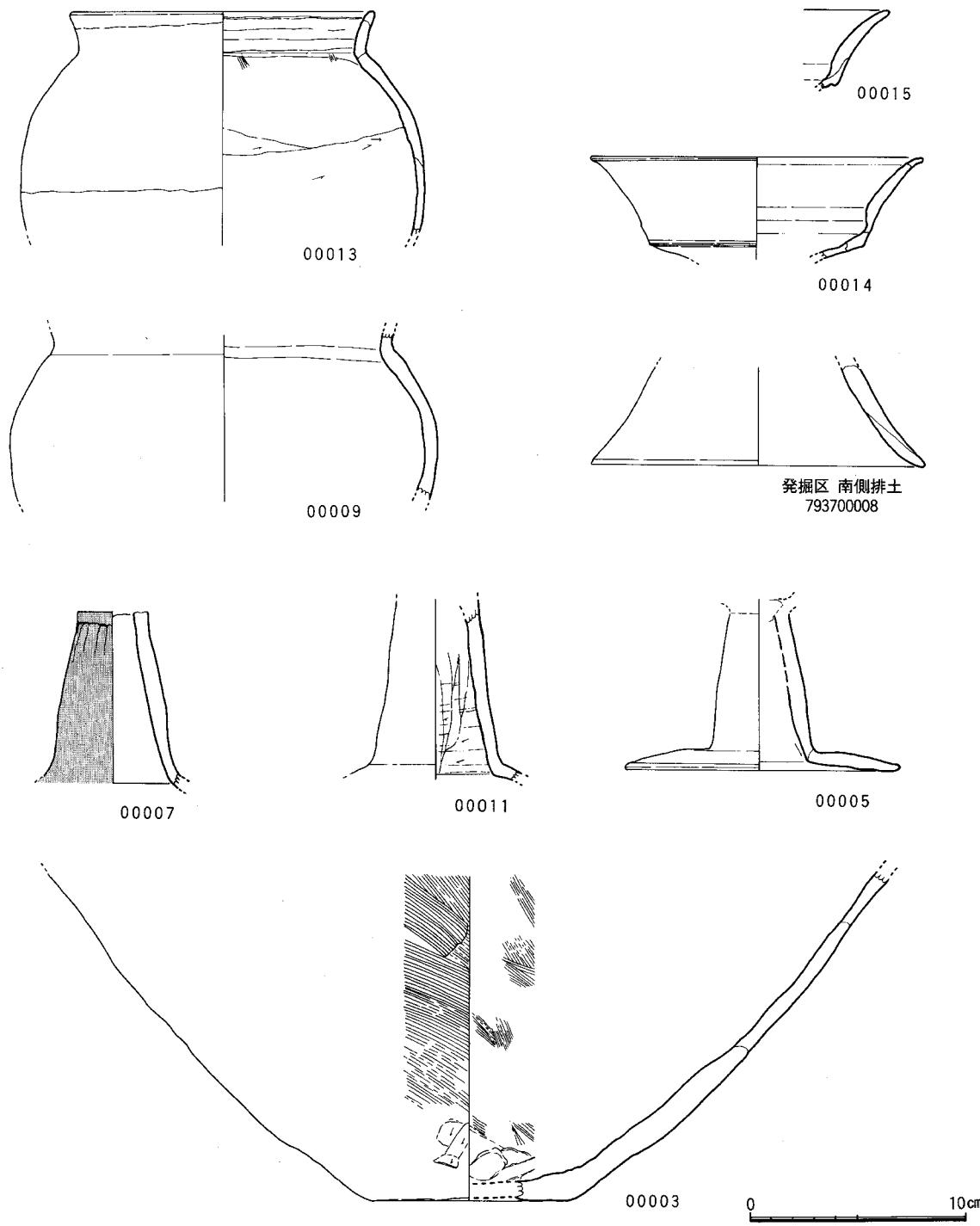


Fig. 7 出土遺物実測図(2) (1/3)

第四章 おわりに

これまで述べてきたように南八幡遺跡第1次調査で検出された遺構は、古墳時代中期の溝遺構4条、柱穴群などであり、この地域における当時の集落の構成などを知るうえでは十分な内容とはいえないものである。検出された溝、柱穴の検出された位置から考えると本調査地点は集落の周辺部にあたり、溝遺構は排水施設などの機能を担っていた可能性が高い。立地から考えると集落の中心は、調査地点の東側或いは南側の丘陵頂部に想定できよう。



Fig. 8 遺構出土状況全体図

第五章 調査の記録

調査概要

調査地点は、標高12.5m前後を測る水田地内であり、調査中の降雨によって遺構検出面は殆ど水びたしの状態であった。

遺構の検出は、表土と床土を除去後、第Ⅲ層（暗褐色粘質土）、第Ⅳ層（暗灰褐色砂土）、第Ⅴ層（褐色砂層）を除去後に地山である灰白色の八女粘土層の上面で検出した。

地山上の各層はいずれも薄層であり、第1次調査で見られるような粗砂が遺構全体を分厚く覆う状況は見られず、寧ろ緩やかな洪水を想起させる。

調査で検出された遺構は、溝2条（S D 01, 02）、土坑5基などであり、密度としては濃いものとはいえない。また、遺物の出土も少なく、該期の遺構から考えると位置的には周辺部にあたると思われる。以下検出遺構について記述する。

検出遺構 (Fig.11,12)

溝 (Fig.11)

S D 01 (Fig.11) 調査区西側隅に検出された南西から北東方向に伸びる小溝である。埋土は、第Ⅲ層の暗灰褐色粘質土であり、後述する S X 01,02 などより時期的に新しく一時期を形成する遺構と考えられる。埋土内から国産磁器2点が出土した。

出土遺物 (Fig.13) 00016は、低い高台を有する碗である。高台よりややあがった位置付近までが露胎となり、釉は淡緑色を薄くかける。また、内面見込には、重ね焼きのための目跡が4個所に見られる。底部径4cmを測る。

00017も国産磁器碗である。やや畳付きのひろい高台を有し、中央に砂目後が残る。高台よりややあがった位置付近までが露胎となり釉は淡褐色を呈する。また、これ以上は薄い緑色釉をかける。

また、内面も同色の釉をかけ、見込との境に砂目跡をおく。いずれも近世の所産である。

S D 02 (Fig.11) 調査区の東側で検出された小溝である。調査区の北側で立ち上がる。時期、性格ともに不詳である。

S X 01 (Fig.11,12) 調査区の西端で検出された楕円形をなす土坑である。形状は、最上部に一段を有し、堅穴となる。底面は、ほぼ平坦であり、壁面もすなおに外方に広がっている。東側の一端には浅い突出部がある。規模は、長径2.3m、短径1.8m、深さ1.3mを測る。埋土は、暗灰褐色の粘質土で、非常に均一なものであり、中間に砂土をはさむ。井戸の可能性が高い。

出土遺物 (Fig.13) 00018は、施釉陶器鉢である。口縁部の上端を薄く引き出し、内面に1条の段を巡らす。内外面共に草色を帯びた黄褐色釉を薄くかける。外面の胴の張る部分は水裂状にひびわれが見られる。生地土は赤紫色を呈する。胎土には非常に多くの石英砂を混入する。調整は、内外面共に横ナデである。口径27.8cmを測る。

S X 02 (Fig.11,12) S X 01の西側に隣接して検出された土坑である。形状は、隅丸長方形を呈し、西側壁は浸食のためかオーバーハンプの状態となっている。埋土は S K 01と同じ

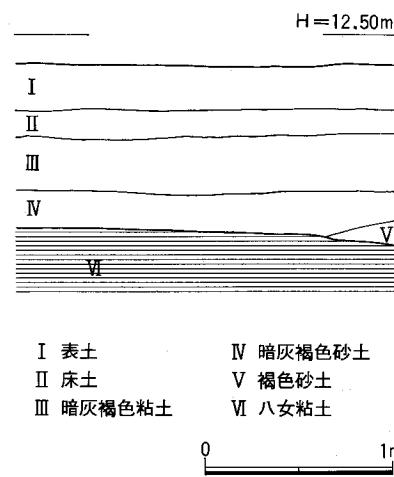


Fig. 9 三筑遺跡土層模式図 (1/40)

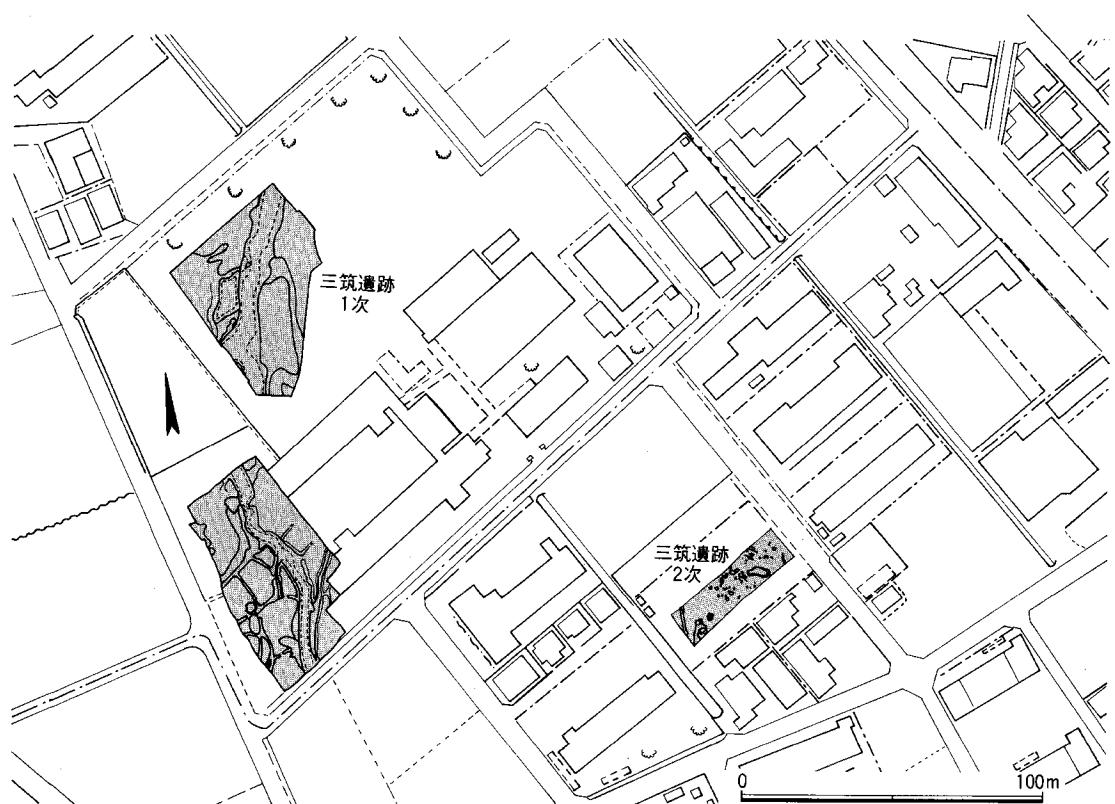


Fig.10 三筑遺跡調査地区図 (1/2500)

様で、暗灰褐色の粘質土であり、出土遺物は無いが埋土から同時期の可能性が高い遺構である。規模は、長径が2.2m、短径が1.6m、深さ1.0mを測る。やはり井戸の可能性が高い遺構である。

S X03 (Fig.11) 調査区の中央付近で検出された小土坑である。長径1.5m、短径1.2m、深さ0.2mを測り、長円形をなす。遺構内より歴史時代の須恵器破片が出土している。

S X04 (Fig.11) S X03の南側に隣接する小土坑で、長径1m、短径0.9m、深さ0.2mの長円形をなす。遺構内より土師器破片が出土した。

S X05 (Fig.11) 調査区の東端で検出された円形土坑である。直径が0.8m、深さ0.05mを測る。

その他の遺構 (Fig.11, 13)

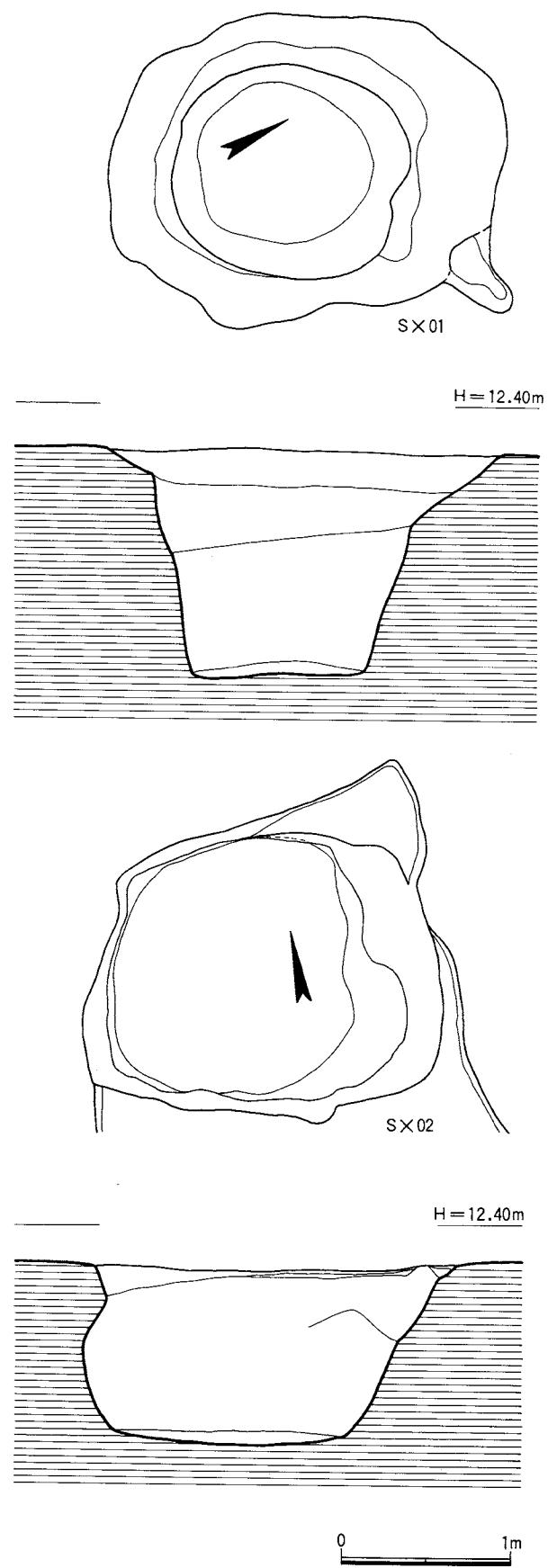
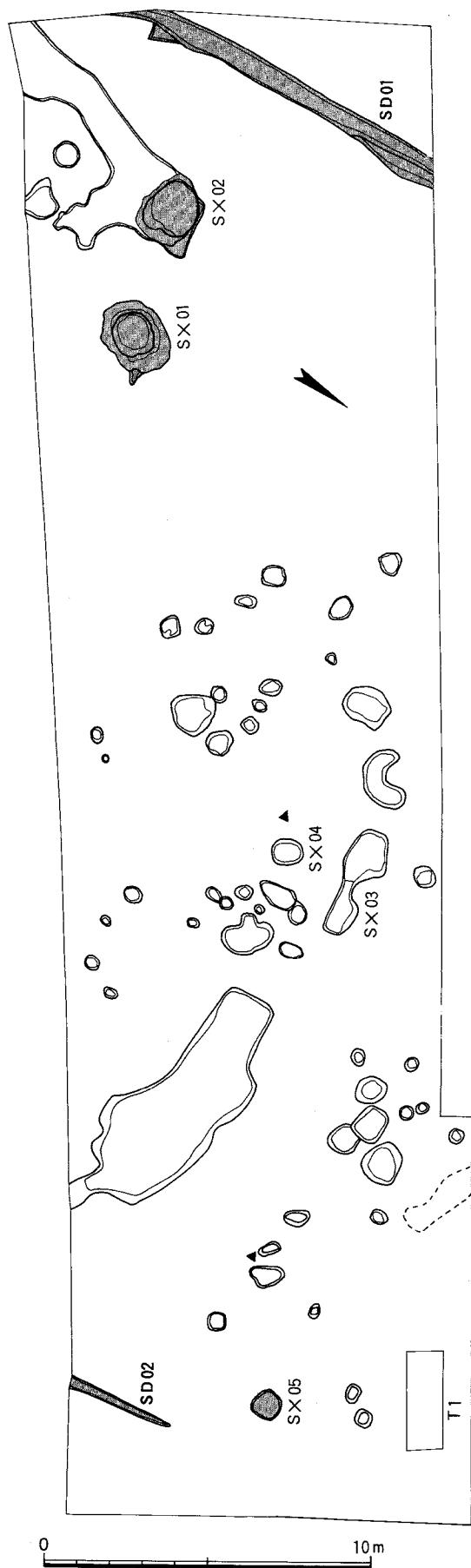
これらの他に、地山面である八女粘土層にめりこむようにして須恵器が2個所で見つかっている。

00019 は、短頸壺である。口縁部を欠く。球状の胴部を有し、外面肩部にカキ目を施す。また胴部下半は平行タタキ目の後にナデ調整を行う。胴部内面の下半は、青海波文を残す。器色は、内外面共に淡灰色を呈する。胴部最大径18.2cmを測る。

00020 は、同様に短頸壺である。口縁部のみを残す。外面にカキ目を残す。器色は、内外面共に淡い灰色を呈する。胎土は、やや粗く、焼成も軟質である。口径14.2cmを測る。

表採遺物 (Fig.13)

00021 は、調査区東側の第1トレンチで出土した須恵器壺の胴部破片である。器色は、淡灰色を呈する。外面は平行する2条の沈線文を巡らし、これ以下には平行タタキ目後にカキ目を施す。内面は



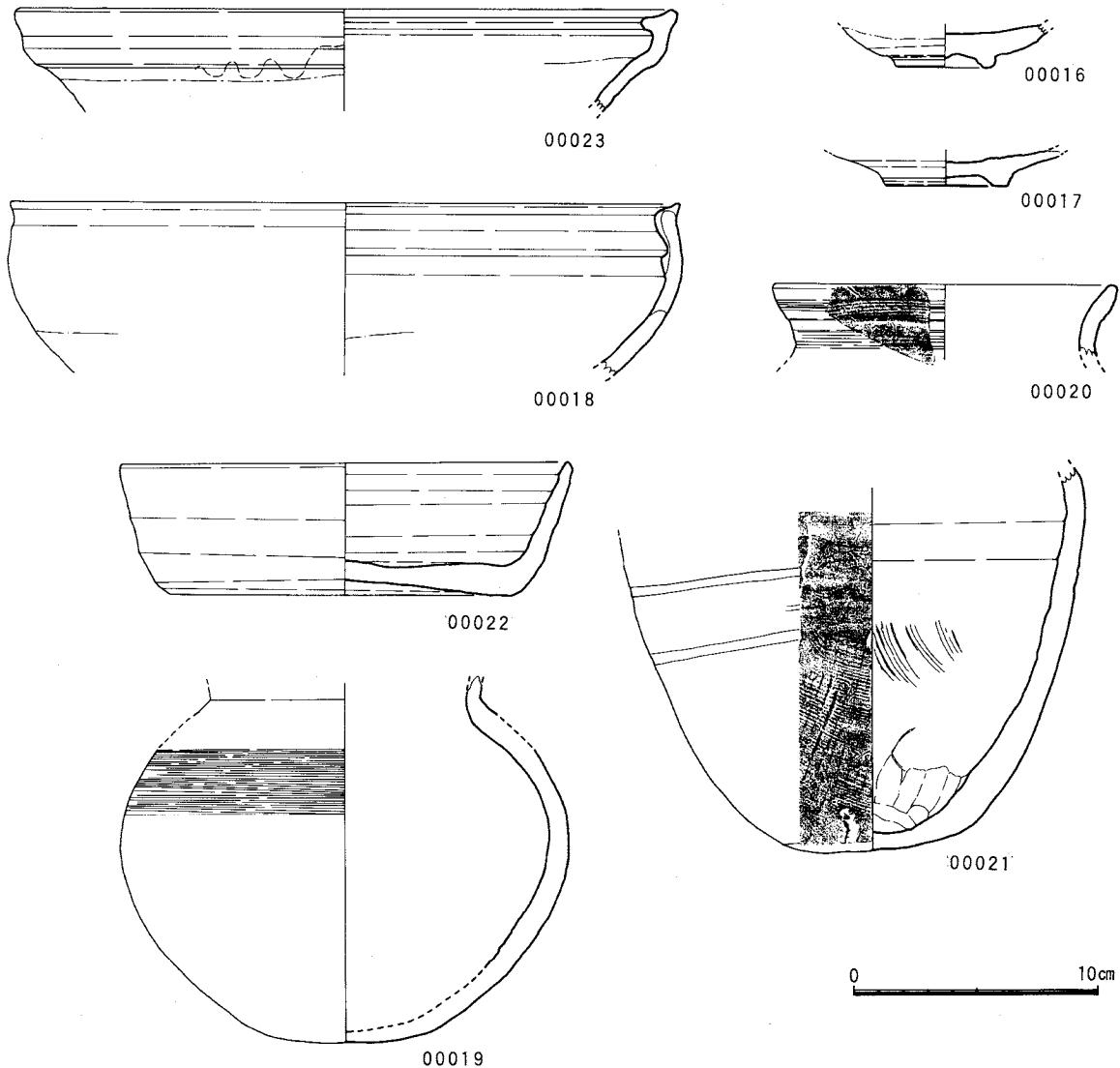


Fig.13 出土遺物実測図 (1/3)

底部をヘラ削りし、胴部は青海波文を一部に残し、他は横ナデを加える。胎土は蜜で、焼成も堅緻である。

00022 は、第2トレンチで出土した須恵器の平底壺である。比較的大型の壺である。器色は、内外面共に淡灰色を呈する。調整は、内外面共に横ナデである。胎土は非常に蜜で、焼成も堅緻である。口径18.7cm、底部径14.2cm、器高5.5cmを測る。

00023 は、国産陶器鉢である。口縁部に特徴があり、施釉は口縁部内外に限られる。釉は、草色を帯びた黄褐色を呈する。なお、露胎の部分は赤紫色を呈する。口縁部径27.4cmを測る。

第六章 おわりに

これまで述べてきたように、南八幡遺跡第1次調査では、古墳時代中期（5世紀前半）の溝遺構などをともなう同時期の集落跡の一部を調査した。検出遺構は、連絡した小溝2条（S D01,03）と西側に隣あって走る小溝（S D04）などで、特にS D01とS D03が分岐する調査区中央部の東斜面では遺構全体図に示した柱穴群のうち黒く塗りつぶした柱穴で当該期の土器破片が出土しており、特に掘立柱建物が集中する部分と考えられる。いずれにしても今回調査地点は、遺構の種類と密度から判断して、集落の中心を占めるものではなく、周辺部にあたるものである。

また、三筑遺跡第2次調査では、明らかな生活遺構は数少なく、井戸と考えられるS X01,02の土坑などから少なくとも中世期にはこの地区の微高地上に集落が進出している。また、中世以後の近世では水田耕作にともなうと考えられる溝遺構が検出され、当時すでに水田としての土地利用がなされていたことがわかった。

両遺跡は、南八幡第1次調査が昭和54年度調査、三筑遺跡第2次調査が昭和56年度の調査であり、これまで調査に関する本報告が未刊行であったが、ようやく今年度で整理を完了することができ、刊行の運びとなった。

報告書の刊行がこのように長期を要したことは、全く調査担当者の怠慢であり、原因者である立石産業株式会社（南八幡遺跡第1次調査）、渡辺重則氏（三筑遺跡第2次調査）に対して深くおわびを申し上げますとともに、感謝の意を表します。

図 版

P L A T E S



南八幡遺跡 遺構全景（東から）



SD-01

SD-04



SD-04

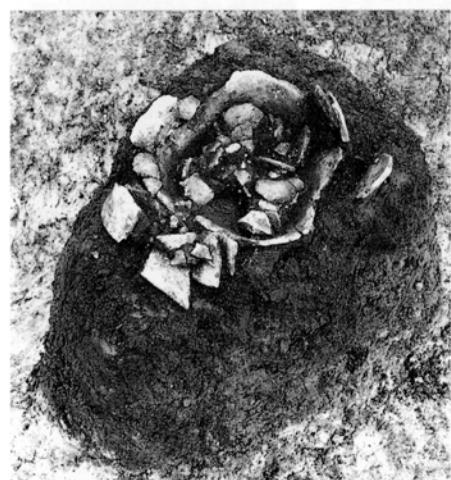


SD-01



SD-03

南八幡遺跡 SD-01・03・04出土状況



南八幡遺跡 SD-01溝内遺物出土狀況

南八幡遺跡第1次・三筑遺跡第2次調査

— 古墳時代集落・近世集落の調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第488集

1997年3月31日

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 久野印刷株式会社

福岡市中央区天神5-5-8
TEL 092-741-0637